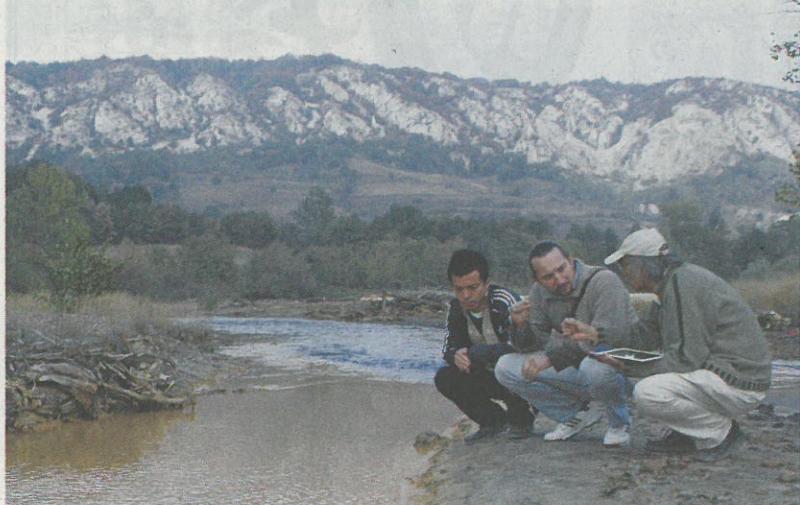


ドナウ川(セルビア)



結婚記念日を祝い、ワインで乾杯する夫婦。市内には川を眺めながら食事を楽しめるレストランが数多くあり、店主自らが漁に出るこの店には、取れたての魚を目当てに大勢の客が訪れていた=ベオグラード



た製油所は何日にもわたって燃え続け、黒煙が空を埋めた。民族対立に端を発したコソボ紛争で北大西洋条約機構(NATO)はユーゴスラビアを空爆、セルビアの工場や発電所、石油精製施設などは徹底的に破壊された。

■ホットスポット
空爆直後、国連は化学物質汚染を確認するた

つてが蓄積しているを突き止めた。しかしブルガルが少なく、実分からぬままだつた。2012年10月、グランド空港に降りた2人の日本人研究者が、ベスコスキートと握手を交わした。大阪大特任教授の大隈(だいわい)ミキは、PCB製業が立地し、海洋やの深刻な汚染が問題になった兵庫県生まれた。中野はこれまでCBの分析や処理技術研究開発などに40年の研究者人生をさきた。

■もう死んでいる「研修で来日した

ゆったりとしたザバ川の流れを受け入れ、ドナウ川はさらに水量を増してかなたまで続く。ローマ帝国の時代から川の合流点を見下ろす丘の上に建つベオグラード要塞から見下ろすと、ここに暮らす人々と川の大切な関わりが見えてくる。

ドイツに源を発し、黒



ズ船に、川沿いの倉庫は現代的なカフェやレストランに姿を変えた。しかし、ドナウ川は今もセルビアの人々の暮らしの間近にある。

■1999年3月24日 カップルや家族が夜遅くまで語り合う川べりのレストランの売り物の一つは新鮮な魚料理。食卓に供する直前に地元の川漁師らが近くの川で取つてきたものだ。

「ベオグラードで生まれ、幼いころから川で生ぶやく。」

3月24日、遠くから響く飛行機の音、さく裂する爆弾の音と衝撃。立ち

上る黒煙。ベスコスキートは大学近くのアパートの一室で、おののきながら見詰めていた。爆撃され

た。しかし、工場などに含まれる有害に紛争の遺産が加わった。その後、ベオグラードの研究チームは、首辺の魚に高濃度のP

今に残る「有毒の遺産」

見えない汚染と戦う
日本との共同研究に期待

世界川物語

~3~